

2018 競技者必携 修正点

2017 競技者必携

2018 競技者必携

2. 第1種公認審判員認定委員会細則

2. 第1種公認審判員認定委員会細則

第1条 (公財)日本ソフトボール協会第1種公認審判員の認定に関する事項を処理するため(公財)日本ソフトボール協会公認審判員規程(以下、日ソ協公審規程という)第9条に基づき、この細則を定める。

第1条 (公財)日本ソフトボール協会第1種公認審判員の認定に関する事項を処理するため(公財)日本ソフトボール協会公認審判員規程(以下、日ソ協公審規程という)第3条に基づき、この細則を定める。

P20

P20

※修正理由

該当条項に誤りがあったため、正しい条項に修正した(×第9条⇒○第3条)

(4) DP (指名選手)

P37



[DP] ・攻撃を行う選手
・再出場できる
・守備にも参加できる
・守備のみはできない

[FP] ・守備を行う選手
・再出場できる
・攻撃にも参加できる
・攻撃のみはできない

覚えてほしい3つのキーポイント
①FPは攻撃のみのプレイはできない。
②DPは守備のみのプレイはできない。
③DPとFPは同時に攻撃はできない。

(4) DP (指名選手) ※イラストを削除

P37

[DP] ・攻撃を行う選手
・再出場できる
・守備にも参加できる
・守備のみはできない

[FP] ・守備を行う選手
・再出場できる
・攻撃にも参加できる
・攻撃のみはできない

覚えてほしい3つのキーポイント
①FPは攻撃のみのプレイはできない。
②DPは守備のみのプレイはできない。
③DPとFPは同時に攻撃はできない。

DPおよびFPのいずれの交代についても、必ず通告しなければならない。

※修正理由

文章による説明で十分に内容を理解できるため、イラストを削除した

8. 打撃について

P42

- 打者に対する10秒ルールは、審判員が打者席に入るよう指示した時点からはじまる。
- 打者の片足が打者席の外の地面に触れたのちは、たとえもう一方の足が打者席内に残っていても、フェア地域で打球が打者に触れればアウトである。
- チェックスイング (ハーフスイング)
ア、打者がグリップ(手首)を利かしたかどうかを見極める。
イ、スイングしたかどうかの確認が困難であったときは、抽手の要求の有無に関係なく、塁審に裁定を求める。
- グリップバントについて
バットのノブの部分が、手より出ている場合は正しいバントとするが、ノブを手で覆っている場合は、球が手に触れたものとする。
- バントの中止は、バットを引く動作がなければ中止とはみなさない。
- バットを両手から離れたのちに投球に当たる打法は、合法的ではない。このようなときは「打者アウト」を宣告する。ただし、空振りの場合は適用しないが、状況により守備妨害を適用することもある。
- 打者が監督のサインを見るために、しばしば打者席を外した

8. 打撃について

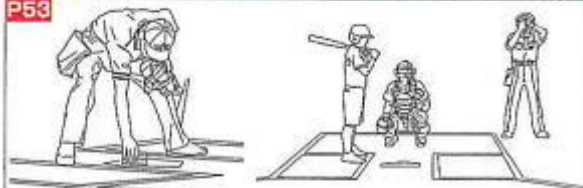
P42

- 打者に対する10秒ルールは、審判員が打者席に入るよう指示した時点からはじまる。
- 打者の片足が打者席の外の地面に触れたのちは、たとえもう一方の足が打者席内に残っていても、フェア地域で打球が打者に触れればアウトである。
- チェックスイング (ハーフスイング)
ア、打者がグリップ(手首)を利かしたかどうかを見極める。
イ、スイングしたかどうかの確認が困難であったときは、抽手の要求の有無に関係なく、塁審に裁定を求める。
- グリップバントについて
バットのノブの部分が、手より出ている場合は正しいバントとするが、ノブを手で覆っている場合は、球が手に触れたものとする。
- バントの中止は、バットを引く動作がなければ中止とはみなさない。
- バットを両手から離れたのちに投球に当たる打法は、合法的ではない。このようなときは「打者アウト」を宣告する。ただし、空振りの場合は適用しないが、状況により守備妨害を適用することもある。※従前の(7)を削除。後の項目を繰り上げ
- 打者が不正打球をしてダブルプレイが成立したときは、「不

※修正理由

R4-8項3(効果3)、R7-3項3(効果3)、R7-3項4(効果4)が新設・適用されるようになったため、従前の(7)は不要となったため、削除。従前の(8)～(13)を(7)～(12)に繰り上げた

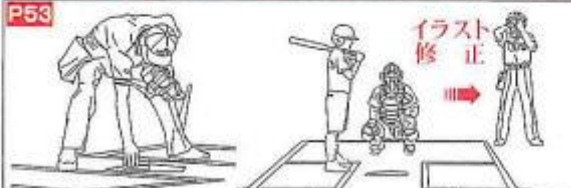
P53



投手に背を向けホームプレートを掃く

マスクは捕手席外で原則として打者の反対側の横で身につける

P53



投手に背を向けホームプレートを掃く

マスクは捕手席外で原則として打者の反対側の横で身につける

イラスト修正

2018 競技者必携 修正点

2017 競技者必携

2018 競技者必携

エ. 球審が、“プレイボール”を宣告するときは、投手が、投手板に**両足**を置くのと同時である。
(プレイ中断からの再開の場合の“プレイ”は、投手が投手板に着いたときに宣告する)

エ. 球審が、“プレイボール”を宣告するときは、投手が、投手板に**軸足**を置くのと同時である。
(プレイ中断からの再開の場合の“プレイ”は、投手が投手板に着いたときに宣告する)

※修正理由

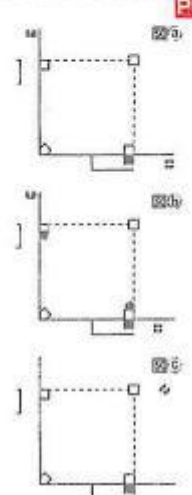
R6-1項「投球の準備」の改正に伴い、「両足」ではなく(両足が触れている場合もあるが、自由足を後方に置くことが認められたので)、「軸足」に修正した

ア. 一塁および三塁塁審
【走者のいないとき】(図⑧)
塁から6~7m程度離れたファウルラインの外側に立つ。(攻守交代時以外は手を後ろに組まないで、立ったままの姿勢でよい)

【走者のいるとき】(図⑨)
タッチプレイに備えて5m程度まで近づく。
また、二塁に走者がいるときは、三塁塁審は定位置より1m程度三塁に近づく。

イ. 二塁塁審
【走者のいないとき】(図⑩)
中継手の守備の助けにならないよう常に注意し、塁から6~7m程度に位置する。

【走者が一・二塁にいるとき】
塁にやや近づいて(塁から4~5m程度)タッチプレイに備える。



ア. 走者のいないとき
塁から5.5m離れた位置に立つ。

イ. 走者のいるとき
走者の位置にかかわらず、どの塁にいても、すべての塁審は塁から4.5mの位置に立つ。

ウ. 一塁に走者がいるときの一塁塁審
塁から4.5m離れ、ファウルラインに沿って、外側に立つ。
(※ラインから離れない)

エ. 三塁に走者がいるときの三塁塁審
塁から4.5m離れ、ファウル地域へ1~2m離れて立つ。

※修正理由

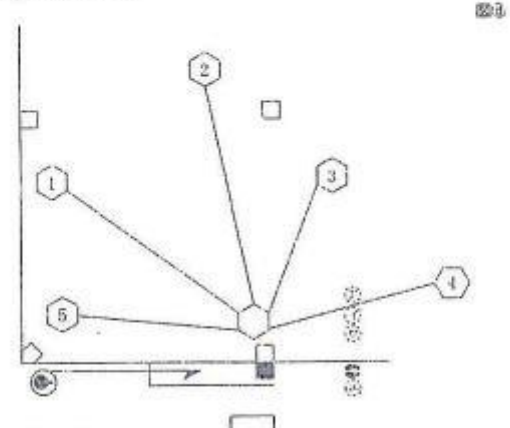
国際大会における塁審の判定位置~~差~~に合わせ、塁審の位置を変更。今後、日本における国際大会の開催も目白押しであり、求められる「国際化」に対応すべく修正を行った

(5) 塁審の動きと判定位置

ア. フォースプレイ
【一塁】(図⑪)
塁から6~7m程度の距離で、送球のコースに対して原則として90度の位置に移動して判定する。
このとき、塁から45度以上は越えないようにし、通常フェア地域の中に3歩移動する。
送球の方向①~⑤により、原則としてア~エの位置に移動する。

①...② ②...① ③...④ ④...③ ⑤...⑥ ⑥...⑤

○は、送球する野手の位置
●は、走者がいないときの一塁塁審の位置
○は、一塁塁審の判定位置
●は、打者走者

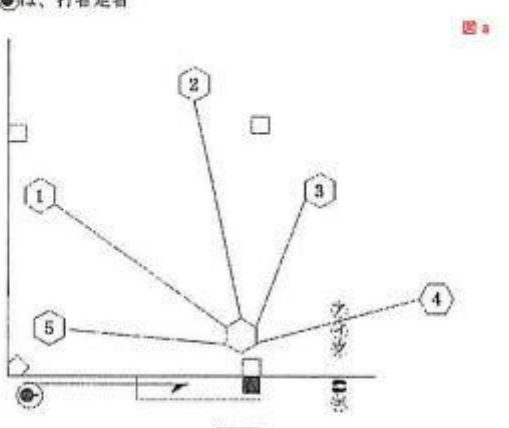


(5) 塁審の動きと判定位置

ア. フォースプレイ
【一塁】(図⑫)
塁から5.5mの距離で、送球のコースに対して原則として90度の位置に移動して判定する。
このとき、塁から45度以上は越えないようにし、通常フェア地域の中に3歩移動する。
送球の方向①~⑤により、原則としてア~エの位置に移動する。

①...② ②...① ③...④ ④...③ ⑤...⑥ ⑥...⑤

○は、送球する野手の位置
●は、走者がいないときの一塁塁審の位置
○は、一塁塁審の判定位置
●は、打者走者

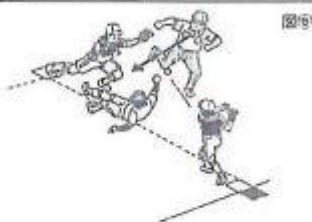


※修正理由 国際大会の塁審の動きと判定位置を基準に修正を行った

2018 競技者必携 修正点

2017 競技者必携

【二塁】(図a)
塁から6~7m
程度の距離で、送球
のコースに対して
90度の位置に移
動し、判定する。



イ. タッチプレイ

【一塁】

タッチプレイは3mぐらいまで近づき、確認し、さらに一歩踏み込んで宣告する。

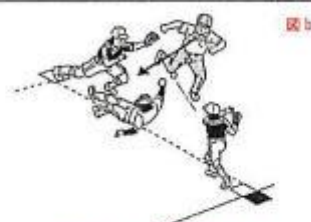
【二塁・三塁】

二塁(三塁)でタッチプレイを見るのに最適な位置に素早く動く。
この場合、遊撃手または二塁手(三塁手)の動き、および送球のコースに注意を払う。

P61

2018 競技者必携

【二塁】(図b)
塁から5.5mの距離
で、送球のコースに
対して90度の位置
に移動し、判定する。



イ. タッチプレイ

【一塁】

プレイは3.5mの距離まで近づき、走路に対して90度の位置で確認し、さらに一歩踏み込んで宣告する。

【二塁・三塁】

二塁(三塁)でタッチプレイを見るのに最適な位置に素早く動く。
この場合、遊撃手または二塁手(三塁手)の動き、および送球のコースに注意を払う。

P61

※修正理由 国際大会の塁審の動きと判定位置を基準に修正を行った

7. 監督の選択権について

P66

- (1) 野手が不正用具でプレイしたとき。
(3-3項(効果)3項、P34)
- (2) 再出場違反したプレイヤーが守備でプレイをしたとき。
(4-6項3(効果)3、P45)
- (3) 無通告交代をしたプレイヤーが守備でプレイをしたとき。
(4-7項(効果)7項、P46~47)
- (4) 打者が不正投球を打ったとき。
(6-1項~7項(効果)1項~7項、P61~62)
- (5) 不正投手が投球した球を打ったとき。
(6-12項(効果)12項、P64)
- (6) 捕手が打撃妨害をしたとき。
(8-1項4(効果)4、P75~76)

7. 監督の選択権について

P66

- (1) 野手が不正用具でプレイしたとき。
(3-3項(効果)3項、P36)
- (2) 再出場違反したプレイヤーが守備でプレイをしたとき。
(4-6項3(効果)3、P47)
- (3) 無通告交代をしたプレイヤーが守備でプレイをしたとき。
(4-7項(効果)7項、P48~49)
- (4) 打者が不正投球を打ったとき。
(6-1項~7項(効果)1項~7項、P64)
- (5) 不正投手が投球した球を打ったとき。
(6-12項(効果)12項、P67)
- (6) 捕手が打撃妨害をしたとき。
(8-1項4(効果)4、P79~80)

※修正理由 ルールブックの該当ページ数が変わったことに伴う修正

試合開始 プレイボール	球審・塁審の構え
<p>球審はマスクを着けて捕手の後に立つ。</p> <p>打者を打者席につかせる。 塁審、プレイヤー、ベースコーチが、所定の位置についたかどうかを確認する。</p>	<p>球審は、捕手の位置を考慮しながら、原則として投手に正対して本塁の中心よりインサイドに構え、両足は肩幅より広く開き、打者側の片足をやや前方にして、捕手に近づいて構える。</p> <p>塁審は、塁に走者のいるときには両手を握り、両足の大腿の付け根付近に軽く添え構える。</p>

P69

試合開始 プレイボール	球審・塁審の構え
<p>球審はマスクを着けて捕手の後に立つ。</p> <p>打者を打者席につかせる。 塁審、プレイヤー、ベースコーチが、所定の位置についたかどうかを確認する。</p>	<p>球審は、捕手の位置を考慮しながら、原則として本塁の中心よりインサイドに構え、両足は肩幅より広く開き、打者側の片足をやや前方にして、捕手に近づいて構える。</p> <p>塁審は、塁に走者のいるときには両手を握り、両足の大腿の付け根付近に軽く添え構える。</p>

P69

※修正理由 「投手に正対して」の文言を削除

基本動作の確認

P90

1. 球審の構え

- (1) 服装を整え、マスク等の用具は必ず着用し、所定の位置につく。このとき、マスクの上のバンドは、頭上に盛り上がらないように注意する。
- (2) 捕手の位置を考慮しながら、原則として投手に正対して本塁の中心よりインサイドに構え、両足は肩幅より広く開き、打者側の片足をやや前方にして、捕手に近づいて構える。



基本動作の確認

P90

1. 球審の構え

- (1) 服装を整え、マスク等の用具は必ず着用し、所定の位置につく。このとき、マスクの上のバンドは、頭上に盛り上がらないように注意する。
- (2) 捕手の位置を考慮しながら、原則として本塁の中心よりインサイドに構え、両足は肩幅より広く開き、打者側の片足をやや前方にして、捕手に近づいて構える。



※修正理由 「投手に正対して」の文言を削除

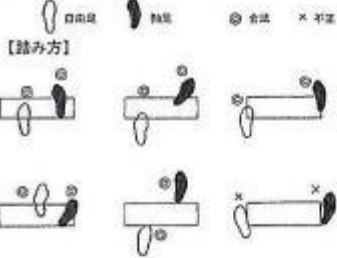
2018 競技者必携 修正点

2017 競技者必携

2018 競技者必携

P120

【右投げ投手】



【踏み方】

(注) 自由足・軸足とも、両足が投手板に触れていれば、合法的な投手板の踏み方である。ただし、足が投手板の側面だけに触れている場合は投手板に触れているとはみなさない。

図1のように自由足がバックステップして、投手板から離れると不正投球になる。ただし、一連の投球動作の中で、つま先が浮いて投手板から離れても、投球開始時と踵の位置が変わらなければ、合法的な投球動作であり、不正投球とはみなさない。

【踏み出し方】

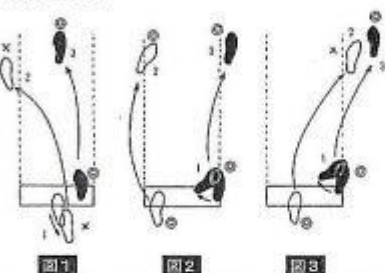


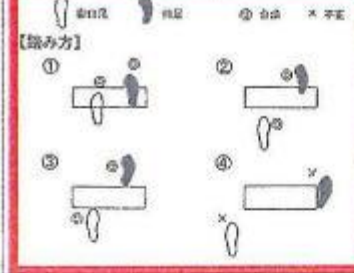
図3のように軸足の踵が一連の投球動作の中で投手板から離れても、つま先の位置が投球開始時と変わっていなければ（つま先が前方に移動していなければ）、合法的な投球動作であり、不正投球とはみなさない。

図1

図2

図3

【右投げ投手】



【踏み方】

(注) 自由足・軸足とも、両足が投手板に触れているか、軸足を投手板に触れながら、自由足を後方に置くのは合法的な投手板の踏み方である。ただし、左図③のように軸足が投手板の側面だけに触れている場合は投手板に触れているとはみなさない。また、自由足を投手板の後方に置く場合は、投手板の両端の後方延長線内に置かなければならない。

上図②、下図(図1)のように自由足が投手板から離れていても不正投球にはならない。また、一連の投球動作の中で、つま先が浮いて投手板から離れても、投球開始時と踵の位置が変わらなければ、合法的な投球動作であり、不正投球とはみなさない。

【踏み出し方】

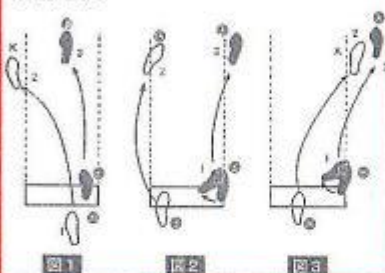


図3のように軸足の踵が一連の投球動作の中で投手板から離れても、つま先の位置が投球開始時と変わっていなければ（つま先が前方に移動していなければ）、合法的な投球動作であり、不正投球とはみなさない。

図1

図2

図3

P120

※修正理由 R6-1項3及び5のルール改正に伴い、イラスト及び解説文を改正されたルールに合わせ、修正した

P121

10. 投手板の踏み方・踏み出し方

図1

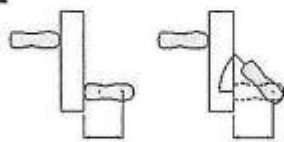


図1 投手板に両足が触れ、正しくセットしており、軸足のつま先の位置が投球開始時と変わらなければ、その後の一連の投球動作の中で踵が投手板から離れても不正投球とはみなさない。

図2

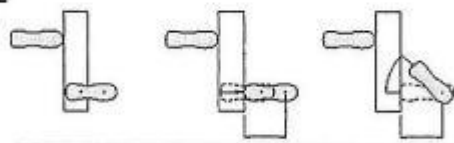


図2 投手板に両足が触れ、正しくセットしており、軸足が投手板の上を前方にスライドしても合法的な投球動作である。また、軸足のつま先の位置がスライドさせた地点と変わらなければ、その後の一連の投球動作の中で踵が投手板から離れても不正投球とはみなさない。

図3

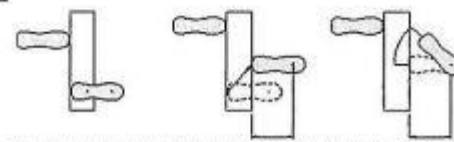
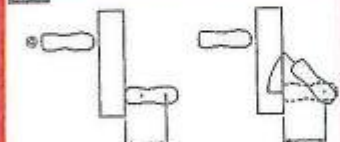


図3 投手板に両足が触れ、正しくセットしており、軸足が投手板の上を斜めにスライドしても合法的な投球動作である。また、軸足のつま先の位置がスライドさせた地点と変わらなければ、その後の一連の投球動作の中で踵が投手板から離れても不正投球とはみなさない。

P121

10. 投手板の踏み方・踏み出し方

図1



自由足は投手板から離れてもよい
(※投手板の両端の後方延長線内)

図1 投手板に両足が触れ、もしくは軸足を投手板に触れながら、自由足を後方に置き、正しくセットしており、軸足のつま先の位置が投球開始時と変わらなければ、その後の一連の投球動作の

図2

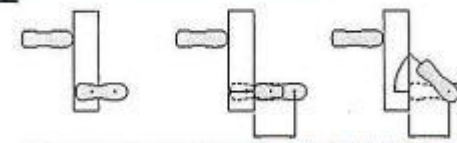


図2 投手板に両足が触れ、もしくは軸足を投手板に触れながら、自由足を後方に置き、正しくセットしており、軸足が投手板の上を前方にスライドしても合法的な投球動作である。また、軸足のつま先の位置がスライドさせた地点と変わらなければ、その後の一連の投球動作の中で踵が投手板から離れても不正投球とはみなさない。

図3

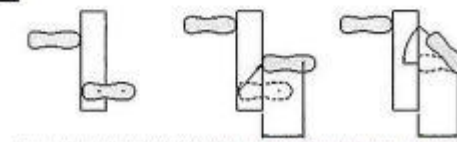


図3 投手板に両足が触れ、もしくは軸足を投手板に触れながら、自由足を後方に置き、正しくセットしており、軸足が投手板の上を斜めにスライドしても合法的な投球動作である。また、軸足のつま先の位置がスライドさせた地点と変わらなければ、その後の一連の投球動作の中で踵が投手板から離れても不正投球とはみなさない。

※修正理由 R6-1項3及び5のルール改正に伴い、イラスト及び解説文を改正されたルールに合わせ、修正した